

Title	『大日本史』写本巻首目録の対照 : 柳沢文庫蔵本・酒井家文庫蔵本による
Author(s)	勢田, 道生
Citation	詞林. 2013, 54, p. 41-63
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67661">https://doi.org/10.18910/67661</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 『大日本史』写本卷首目録の対照

— 柳沢文庫蔵本・酒井家文庫蔵本による —

勢田 道生

一

水戸藩による『大日本史』の編纂は、明暦三年の史局創設に始まり、明治三十九年に紀伝志表三九七巻が完成するまで、数次にわたって改訂が行われている。このうち、正徳五年に成った「正徳本」と享保五年に幕府に献上された「享保進献本」について久野勝弥氏は、氏の所蔵する写本三本の内容と水戸・江戸両史館の『往復書案』や藤田幽谷『修史始末』の内容とを比較検討し、この三本が、あるいは正徳本の、あるいは享保進献本の形態を留めることを明らかにされている。

一方、稿者はさきに、久野氏の論を視座として『大日本史』の伝本を調査し、寛政頃までには正徳本系統の伝本が一定の範囲内で流布していたこと、また、津久井尚重『南朝編年記略』(天明五年自序)が参照した『大日本史』も正徳本系統だったと考えられることを指摘した。<sup>4)</sup> そうである以上、近世中後期の歴史研究やその受容について検討する際には、『大日本史』の影響の可能性を想定する必要があるろう。

しかし、『大日本史』の内容は膨大であり、その全体を把握するのは容易ではない。また、現在容易に参照できる活字本も明治以後のもの(以下、明治本)<sup>5)</sup>であり、嘉永版本以前の『大日本史』受容について考察する場合には問題がある。そのような中で、正徳本系統と享保進献本系統との相違を、現存する伝本に即して具体的に示された久野氏の論は貴重な成果だが、氏の指摘も多くの相違のうちの一部についてであり、なお多く検討の余地がある。すなわち、『大日本史』の成立過程や受容の様相を明らかにするためには、『大日本史』の各段階の伝本に即し、さらに詳細な検討を行う必要がある。

このような問題意識により、本稿では、『大日本史』の正徳本系統・享保進献本系統の伝本を参照する際の手引として、『大日本史』享保進献本系統・正徳本系統の各巻巻首目録<sup>6)</sup>を対照して示し、情報の整理と共有を行いたい。なお、本稿では、明治本は大日本雄弁会本に、享保進献本系統は小浜市教育委員会所蔵酒井家文庫本(二一〇・二三三。書写年次不明、小浜藩校(江戸)蔵書印、山口菅山(安永元〜嘉永七)蔵書印あり<sup>8)</sup>。

以下、小浜本)に、正徳本系統は公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会所蔵本(宝暦一四年～明和二年、柳沢伊信・荻生金谷等、藤堂家本により写。以下、柳沢本)による。

二

まず、『大日本史』正徳本系統・享保進献本系統の本紀・列伝の部立構成を示す。

▼本紀 卷一～卷七十三(七十三卷)

▼列伝 卷七十四～卷二百四十三(百七十卷)

・后妃 卷七十四～卷八十五(十二卷)

・皇子 卷八十六～卷九十九(十四卷)

・皇女 卷百～卷百五(六卷)

・(常伝) 卷百六～卷百七十八(七十三卷)

・將軍 卷百七十九～卷百八十六(八卷)

・將軍家族 卷百八十七～卷百九十一(五卷)

・將軍家臣 卷百九十二～卷二百十三(二十二卷)

・文学 卷二百十四～卷二百十八(五卷)

・歌人 卷二百十九～卷二百二十二(四卷)

・孝子 卷二百二十三(一卷)

・義烈 卷二百二十四(一卷)

・列女 卷二百二十五(二卷)

・隱逸 卷二百二十六(一卷)

・方技 卷二百二十七(二卷)

・叛臣 卷二百二十八～卷二百三十(三卷)

・逆臣 卷二百三十一(一卷)

・外国 卷二百三十二～二百四十三(十二卷)

右のように、正徳本系統と享保進献本系統とに、部立構成の相違はない。これに対し、嘉永版本・明治本は、將軍家族伝を卷百八十七～百九十の四卷に宛て、以下一卷ずつ繰り上がり、叛臣伝に卷二百二十七～二百三十の四卷を宛てる。また、明治本は「外国伝」を「諸蕃伝」とする(嘉永版本は「外国伝」)。

以上を踏まえ、後掲の表には、上段に享保進献本系統として小浜本を、下段に正徳本系統として柳沢本を配し、卷ごとに卷首目録を対照し、相違がある卷について、その相違を示した。明治本と小浜本とが相違する場合は、上段に小浜本の卷首目録を示し、小浜本と柳沢本とが相違する場合は、下段に柳沢本の卷首目録を示している。ただし、各卷卷首目録の全体を挙げるのは煩瑣であるため、卷首目録のうち、冒頭から一致が連続する場合は、一致する部分の末尾の人物を掲記した上で「(▲以上同)」または「(▲以上明治本卷(幾)に同じ)」と注記し、卷首目録の途中から末尾まで一致が連続する場合は、一致する部分の冒頭の人物を掲記した上で「(▼以下同)」または「(▼以下明治本卷(幾)に同じ)」と注記した。また、后妃伝・皇子伝・皇女伝については、卷首目録掲載の人物が極めて多いため、后妃・皇子・皇女のかかる天皇ごとに対照

し、他の紀伝と同じ要領で相違を示した。なお、誤写・誤字によると思われる相違しか存しない場合は、掲載を省略した。<sup>〔12〕</sup>  
 なお、明治本・享保進献本系統・正徳本系統以外の相違は以下の通り。

まず懐徳堂本<sup>〔13〕</sup>について。前稿で触れたとおり、同本は柳沢本を親本とするが、書写の際、『大日本史賛藪』（享保進献本に付された論贊のみをまとめたもの）を参照して賛を補うとともに、柳沢本では巻六に存した仁賢天皇紀を巻五に移しており、巻首目録もこれを反映している。よって、これと同じ相違がある伝本は、懐徳堂本を祖本とすると考えられる。

次に嘉永版本について。嘉永版本の巻首目録は基本的に明治本のそれと同じだが、嘉永版本の外国伝は明治本諸蕃伝の構成と大きく異なり、巻二百三十四〜巻二百四十二は享保進献本系統と同じで、残る巻二百四十三を左のように立てる。

蝦夷下

肅慎

女真

琉球

吐火羅（舍衛 南天竺 林邑）

崑崙

また、明治本（大日本雄弁会本）巻首目録は、巻七十七「女御滋野繩子」を淳和后妃の末尾に記すが、嘉永版本は仁明后妃の三人目に記している。<sup>〔14〕</sup>

### 三

最後に、管見に触れた『大日本史』写本について簡単に紹介する。

管見に触れた伝本は、残欠本を含め四十八本。このうち、享保進献本系統の三本、正徳本系統と享保進献本系統の取り合わせと考えられる二本、および、正徳本系統（懐徳堂本の類を含む）のうち、寛政年間以前の書写が確認できる十三本については前稿で言及した。よって、以下には、これら以外の伝本（すべて正徳本系統）について紹介する。なお、これらを正徳本系統と判断したのは、専ら巻首目録の相違によるため、巻首目録に相違がない部分については、他系統のものが取り合わされている可能性がある。また、標注や欠画については網羅的に確認したものではないが、該本の伝写経緯や書写年代を窺う上で有益であると考え、付記した。

A、藤堂家本類（柳沢本と同様、後小松紀下のみ賛あり）

①三春町歴史民俗資料館蔵本（C一〇五）

論贊共一三三冊。三春藩旧蔵（印）。巻二三二以下欠。

②酒田市立光丘文庫蔵本（二五一四）

論贊共三八冊。本間光丘（享保一七〜享和元）旧蔵（印）。寛政五〜七年写力（酒田市指定文化財目録、平成一〇年版）。  
 標注「方壺云……」「兼云……」「充云……」「道云

- ……「良器云……」あり。卷七六・光仁井上皇后伝に  
 賛を補写(朱)
- ③史跡足利学校事務所蔵本(一五・一七)  
 賛藪共一一五冊。長澤仁右衛門(桐生)旧蔵(印)。卷七  
 四〜七五欠。
- ④国立国会図書館蔵本(一九六・一四)  
 賛藪共九九冊(合三三冊)。丸岡藩校平章館旧蔵(印)。「大  
 日本史目録下」欠。標注「方壺云……」「兼云……」「充  
 云……」「道云……」「良器按……」「経之云……」「卿云  
 ……」。「兼按……」あり。
- ⑤国立公文書館蔵内閣文庫本(一三八・一〇二)  
 論賛共五三冊。林述斎旧蔵(述斎衡新取記「印あり」)。卷  
 九四〜一〇、一七一〜一七三、一七九〜一八三、二〇  
 一以下欠。卷三奥書「得業生藤田利勝校」。
- ⑥東京国立博物館蔵本(と一〇三四三)  
 二四七冊。一橋学問所旧蔵(印)。整理名「大日本史稿本」。  
 補入・校合は享保進献本系によるか。同館所蔵マイクロ  
 フィルムにより閲覧。
- ⑦東京大学総合図書館蔵本(G二二・一〇二)  
 論賛共六一冊。南葵文庫旧蔵、印記「坤堂蔵書」。最終  
 冊末尾「進大日本史表」(文化七年、徳川治紀)を補写。
- ⑧東京大学総合図書館蔵本(G二二・一七八)  
 論賛共四五冊。天保十五年〜弘化三年、白石貞貫、篠崎
- 小竹梅花屋本により校、弘化四年、長田黙成斎本により  
 校(奥書)。卷二七奥書「浪花 後藤氏校正」。朱書標注「早  
 衡云……」あり。
- ⑨前田育徳会尊経閣文庫蔵本(二・三〇) 八五冊  
 賛藪共八五冊。標注「通邦按……」「邦按……」「方壺云  
 ……」あり。「兼」字に欠画あり。
- ⑩小浜市教育委員会蔵酒井家文庫本(二一〇・二三四)  
 論賛共九三冊。遠敷郡雲浜図書館旧蔵(印)、罫紙柱「幽  
 芳堂蔵」。標注「通邦按……」「邦按……」あり。
- ⑪名古屋蓬左文庫蔵本(七〇・三)  
 七〇冊。尾張藩校明倫堂旧蔵(印)、印「中島/氏印」(朱  
 あり)。卷一〜二三欠。付箋多数あり。原態は本紀列伝八  
 三冊か(表紙記載)。
- ⑫名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫蔵本(二二〇・一/  
 D)  
 九五冊。外宮御師来田家旧蔵(印)。
- ⑬神宮文庫蔵本(五門二七七)  
 論賛共一〇〇冊。林崎文庫旧蔵。卷一五六奥書「鷹羽主  
 税校読」。「印本」による校異注記あり。「兼」字・「統」  
 字に欠画あり。
- ⑭大阪天満宮蔵本(別二四)  
 賛藪共六〇冊。尾張藩古筆見恒川了廬旧蔵(印)。卷一  
 六六奥書「文化十四年丁丑七月十四日」。標注「肅按

……「朗按……」（胡粉にて抹消）、「通邦按……」「邦按……」あり。

⑮池田市立歴史民俗資料館蝸牛廬文庫蔵本（八三六・八九二）

賛藪共六三冊。林田家（池田）旧蔵。奥書、卷四〇「庚寅九月廿五日校」（朱）、卷四四「庚寅十一月至日校」、卷九六「早之衝／早之衝」同校。卷四八・六ウ・欄外に「右四五六三葉小竹先生所書」。卷二二四、柱に墨書「梅花屋蔵書」。標注「善按……」「彌云……」「経徳按……」あり。

⑯和歌山大学附属図書館紀州藩文庫蔵本（二二一・六）

論賛共六〇冊（二冊は『紀州藩文庫目録』録外）。紀州藩校学習館旧蔵（印）。「仙石本類聚国史」による朱の書入あり。朱書入「清矩云……」あり。※瀧野邦雄「紀州藩文庫所蔵『大日本史』について」（『紀州経済史文化史研究所紀要』26、平7・7）参照。

⑰土佐山内家宝物資料館蔵本（ヤ二一〇・二）

八六冊。文政十二年宮地仲枝写（親本は「衣斐氏蔵本」）（奥書）。卷八奥書「右一卷、中山巖水手写所贈予也／<sup>（朱印）</sup>北溪先生書在昔年所行而賜予也 仲枝識」。卷一三九奥書「以上二卷、北溪先生昔日手写所行而所賜予也 仲枝識」。国文学研究資料館蔵マイクروفイルムにより閲覧。

⑱佐賀県立図書館鍋島文庫蔵本（鍋島報效会寄託）

賛藪共六九冊。印「萬乗庫印」・「鍋島家蔵」あり。「目錄下」末尾に墨書「弘道館蔵」、卷一三〇末尾に墨書「弘道館」。卷一〜四三、一三五〜一三七欠。原態は八二冊＋賛藪三冊か（表紙記載）。※虫損・水損のため開披不能箇所多し。

⑲佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵本（二二一・七）

九七冊。小城鍋島藩校旧蔵（印）。卷一二・一三、二二〜二四、三一、三四・三五、四〇・四一、六三・六四、六八、七六・七七、八六〜九〇、九七・九八、一〇六〜一四四、一五四〜一五七、一六〇・一六一、一七一、二〇〇〜二〇五、二二五、二三四・二三五、二四二・二四三欠。

B、懷徳堂本類（藤堂家本類に中井竹山の校訂を反映）

⑳東京都立中央図書館蔵本（和一二二）

六二冊。丸山季夫氏寄贈本。卷八五〜一〇六、二二五〜二二八欠。「秦氏校正本」「一本」「諸本」による校合注記あり。冷泉天皇紀賛欠。

㉑大阪天満宮蔵本（別五三）

六〇冊。近藤南州旧蔵（印）、印「尾崎蔵書」あり。第三冊末尾奥書「丁酉十一月念一夕南州説過」。

㉒大和文華館蔵本（一・四八九〜五四八）

六〇冊。鈴鹿連胤旧蔵（印）。卷二一六冒頭に「大友黒

主小伝」(安政二年矢盛教愛識語あり)あり。国文学研究資料館蔵紙焼本により閲覧。

②3 鹿児島大学附属図書館玉里文庫蔵本(地二・二〇〇八)

六九冊。島津久光写(『玉里文庫目録』)。卷一九五〜二二

〇欠。第五九冊以下、表紙が異なり、各伝末尾論賛欠。

第三冊見返「以宮城家拝領写本校正」。第七冊卷十三冒頭欄外に「以御本続日本紀校正」(朱)

C、その他(巻首目録は正徳本系。詳細不明)

②4 一宮市立中央図書館蔵本

二七冊。有隣舎鷺津氏旧蔵(印)。存卷一〜五三。

②5 岐阜市立図書館蔵本(二一・八)

七〇冊。楠堂文庫本。三宅樞台旧蔵か。卷一七二・菊池

武光伝に「山陽先生筑後河戦処之作 三宅<sup>(字不明)</sup>謹刪」五紙

挟み込み。賛は補写か。

②6 津市立津図書館橋本文庫蔵本(橋二・二〇一〜二三一)

三一冊。存卷四八〜一三七、一四一〜一四六、一五一〜

一五四、一六七〜一七〇、一八七〜一九一。賛の有無は

巻により区々、別筆による補写か。

②7 神宮文庫蔵本(五門二七六)

一〇四冊。林崎文庫旧蔵(嘉永四年荒木田守雅寄贈本)。

卷一一〜二四のみ賛あり(後小松紀は無賛)。第九冊(大

日本史目録下)奥書「文政六年十二月二十六日、借桐友

寿書凡例目録都四冊写畢。葦能耶蔵書。卷十に大久保

達(湘南)の七言律詩一首・七言絶句三首を記した一紙

を挟込み。「北朝后妃伝」「北朝皇子伝」(国校本)によ

る補)「北朝皇女伝」(学校本)による補)あり。卷一一六、

尾題につづき、「此伝可入大伴古麻呂伝之次」とし、「国

校本」により大伴継人伝を補う。「兼」字に欠画あり。

②8 九州大学附属図書館蔵本(六一〇・タ・九)

二五冊。樋口文庫本(樋口和堂旧蔵)。存引用書目・修史

義例・目録上中下・序・卷一〜三六。文化五〜九年、矢

賀部恒貞・横枕秀実・松本得養・牛嶋忠篤・佐野正路・

佐野誠成・「精知」写。

②9 久留米市立中央図書館蔵本(国七・一五)

二冊。江崎文庫本(江崎済旧蔵)。存卷一三一〜一四七カ

(破損により開披困難)。

③0 秋月郷土館蔵本(三・三一)

二六冊。秋月八幡宮本。存目録上中下、卷六二〜六六、

八八〜二四三。目録上末に「樋口精義(花押)」。各冊背

に墨書「共五十冊」。「イ」・「刊本」による校異書人あり。

web公開に際し、翻刻は省略しました



web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました



web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

注

- (1) 吉田一徳「大日本史紀伝志表撰考」（風間書房、昭40）、山高志「大日本史」刊刻の周辺（『近世常陸の出版』青裳堂書店、平11）、『日本史文獻解題辞典』（吉川弘文館、平12）「大日本史」項（鈴木暎一執筆）など参照。
- (2) 久野勝弥「大日本史」筆写本三種について―「正徳本」「享保進献本」と「足利治乱記」（『藝林』55・1、平18・4）。以下、久野氏の論はすべてこれによる。
- (3) 正徳本原本および享保進献本原本の内容の詳細は明らかでないため、本稿では、久野氏の指摘される享保進献本成立時の改訂を基準とし、この改訂より前の状態を存するものを正徳本系統と称し、この改訂を反映したものを享保進献本系統と称する。なお、享保進献本より後の段階に属すると考えられる写本は、未だ管見に触れない。また、正徳本系統の伝本のうち、後掲「A、藤堂家本類」は、後小松天皇紀に賛が付されている。賛は享保進献本に付されたものであり、正徳本系統の伝本に存するのは不審だが、その原因については未考。
- (4) 拙稿「津久井尚重『南朝編年記略』における『大日本史』受容」（『近世文藝』98、平25・7）。
- (5) 『大日本史』（阪上半七、吉川半七、明33）大7（和装本）、『大日本史』（吉川半七、明44（洋装本）、義公生誕三百年記念会編

web公開に際し、  
翻刻は省略しました

- 纂『大日本史』（大日本雄弁会、昭3）4。
- (6) なお、久野氏は、氏の架蔵本に付される「目次」（『大日本史目録』）の相違（二十二箇所）を示されているが、「大日本史目録」と各巻の巻首目録とは必ずしも一致しない。これは「大日本史目録」の成立事情や記載方針によるものと思われるが、詳細は未考。
- (7) 「兼」字に欠画のものがあることから、光格天皇治世中の写か。
- (8) 小浜市立図書館編『酒井家文庫綜合目録』（小浜市立図書館、昭62）。
- (9) なお、小浜本は虫損のため状態が良好とはいえず、享保進献本系統の内容を詳細に検討するためには、より良い伝本が求められる。また、前稿（注4）では津市津図書館有造館文庫蔵本について、各巻巻首目録の相違により享保進献本系統と判断したが、同本のうち、巻一二三〜巻一二六（第二九冊前半）、および、巻一七七（第四〇冊後半）〜巻一八五（第四二冊）は他の部分とは料紙が異なる。この部分を、小浜本および柳沢本の写である大阪大学附属図書館懷徳堂文庫蔵本（明和八年）安永元年、中井竹山等写）と比較する（各巻冒頭・末尾の二丁分を確認した）と、その本文は後者と一致する。よって、有造館本の補写部分は正徳本系統によると考えられる。
- (10) 以下、嘉永版本は大阪大学附属図書館懷徳堂文庫蔵本による。
- (11) 字体は通行のものに統一し、小浜本の朱による訂正箇所は、訂正後の文字により示した。また、細字書きの部分は◇で括弧で示した。
- (12) なお、前稿（注4）では正徳本系統と享保進献本系統との巻首目録を比較し、仁明天皇紀〜後龜山天皇紀の部分の他、計七十七巻に相違が認められたとしたが、今回、小浜本により精査する

と、相違するのは計八十六卷となった。お詫びして訂正する。

(13) 前注(9)。

(14) 明治刊本のうち、吉川半七洋装本は大日本雄弁会本と同じだが、吉川半七和装本は嘉永版本と同じ。なお、本文ではいずれも仁明后妃にかける。仁明后妃とするのが正しい。

(15) このうち、前稿(注4)では享保進献本とした津市図書館有造館文庫蔵本が取り合わせ本であることは、前述した(注(9))。

〔付記〕『大日本史』写本の閲覧に関し、多くのご高配を賜りました各所蔵機関に御礼申し上げます。なお、本稿は平成二十五年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費、課題番号25・2490）の成果の一部である。

（せた・みちお 日本学術振興会特別研究員）